

特集

補助器具から福祉用具へ～誇り・ぬくもり・輝きの支え手として～

大熊 由紀子

(国際医療福祉大学大学院教授・医療福祉ジャーナリズム分野)

1. わが家におきたこと

原稿をお引き受けしたときには想像もしていなかった事態がこの7月、わが家を襲いました。独り暮らしの母が悪性リンパ腫IV期と診断されたのです。

PET で調べると、癌細胞は全身に広がっていました。10年前に癌で片方の腎臓を摘出している上に、狭心症もちの90歳。入院先の主治医の見立ては、「8月末まで持つかどうか」でした。

私は在宅で看取る決心をしました。そして、福祉用具の分野に堪能なケアマネジャーである友人に相談しました。認定の結果は要介護3。レンタル事業者の方が、3モーターのベッド、トイレの立ち上がりフレーム、車いすを運び込み、転倒を招くトイレのドアを取り外してくださいました。代りに母の好きな星座の描いたノレンをかけました。

試験外泊ごとに、シャワーチェア、バスボード、車いす用クッションと、道具は増えてゆきました。抗ガン剤が効いて癌が半分に縮小したとはいえ、病院では「患者」そのものに見えた母から病人らしさが薄れてゆきました。

伝い歩きしやすいように、手すりの役目をするフットボードのついたタイプのベッドに取り替えていただいていたからは、夜のトイレも自分ひとりでいけるようになって、みるみる自信と誇りを取り戻してゆきました。

2. 告白しなければならないこと

自宅での看取りに備えて、まず、福祉用具を思い

浮かべたのには訳があります。でも、その前に、私の過ちを告白しておかなければなりません。

1980年代はじめのある日、科学部のデスクだった私のもとに、1人の部員が「寝たきり老人用ベッド開発中」という記事を書いてもってきました。

ボタンを押すと、ベッドの真ん中がパッキリ開いて「寝たきり老人」でも用が足せる。もう1つのボタンを押すと、ベッドが自動的にバスタブに変身し、ほどよい温度の湯が注ぎ込まれ、家族やナースはラクに入浴させられる。強力な換気扇がついているので臭いもしない、そんな風な装置です。

このベッドに惚れ込んだ記者の熱気が私にも伝染し、この原稿を、そのまま朝日新聞の健康面に載せてしまいました。「寝たきり老人」とはコチンコチンで起こすことができない人と思ひ込み、ケアする立場からしか考えていなかった30年前の無知な私でした。

3. 日本独特だった「寝たきり老人」

この判断が大間違いだったことに気付いたのは、1985年のことでした。その前の年、私は科学部から論説委員室に移りました。科学・技術・医学・医療という馴染みの分野に加えて、福祉と年金の社説も受け持つように命ぜられました。

当時、厚生行政の分野では「寝たきり老人」が深刻な課題とされていました。「西暦2000年には寝たきり老人が100万人になる」と予測されていました。私は解決のヒントを求めて、日本よりはるかに先に高齢化したヨーロッパを訪ねました。そして、思いがけないことに出会ったのです。

「寝たきり老人」が見当たらないのです。それどころか「寝たきり老人」という言葉を直訳しても通じません。脳味噌を絞りに絞りに、こう尋ねてみまし

国際医療福祉大学大学院

〒154-0002 東京都世田谷区下馬 6-45-9

yuki@spa.nifty.com

た。「たとえば、脳卒中の後遺症で半身不随になって寝返りも打てず、寝間着をきて天井をぼんやり見ているご老人のことなのですが……」

先方はやっと分かったという顔をしていました。

「あなたがおっしゃっているのは、ケアが必要な年金生活者のことですね。でも腑に落ちないことが2つあります。“寝間着”と“天井をぼんやり”というところですよ」

私は、「寝たきり老人」を「ケアの必要な年金生活者」と言い換えただけなのではないかしら疑い、言いました。「その方たちに会わせてください」。

すると先方は言いました。「ほらあそこにおられますよ」(写真1)。



写真1

いわれて振り返ると、電動車いすにのったり、歩行器を押したりして歩いている人々の姿が目に入りました。おむつを離せず、認知症も進んでいる左の写真のような老婦人が、美しく髪をととのえ、イヤリングをつけ、爪にマニキュアでして、外出や食事を楽しんでいました。右の女性はリウマチが進んでいるので電動車いすです。

4. 補助器具センターというシステム

なぜ、そのようなことが可能なのかの全体像は、『「寝たきり老人」のいる国いない国』をお読みいただくとして、ここでは、第1章の「秘密その7・補助器具センターは地下室が凄い」のサワリをお伝えします。

写真2は、人口25万人に1つほどある補助器具センター。そこには約3000種の器具が揃っていました。車いすだけでも100種類。そのうち電動車いすが30

種。杖が100種類。

利用者は生後数カ月の赤ちゃんから100歳のお年寄りまで。不自由な手でも食事や料理するのを助ける自助具は、カラフルで楽しいものばかりです。



写真2

このセンターを例にとると職員10人のうち作業療法士6人、理学療法士1人、溶接板金の技術者2人、事務職1人。一人一人に合った器具を選び、試験的に貸し出し、体に合わせて改良し、使い方を徹底的に教えます。

補助器具が威力を発揮できるように下の写真3のように、退院前に住宅の改修もしてしまいます。



写真3

補助器具の力に感動した私は、92年11月17日の社説「補助器具を眼鏡のように」で、日本の実践を紹介しながら、こう書きました。

「目や耳や手足や知能のハンディキャップを克服するために、人間は様々な発明をしてきた。デンマークやスウェーデンではイエルフ・メーデル(補助器具)、英語圏ではテクニカル・エイド(技術的に補助するもの)と呼ばれ、長い歴史をもっている」

5. 福祉用具法誕生!!!!!!

そのころ、補助器具に関する法律をつくろうと密かに策を巡らせている人物が通産省にいました。雨貝二郎さんです。

その方は突き止めて『物語・介護保険』下巻の第58話「福祉用具法～父の思いと“手練手管”と」に書きました。抜き書きしてみます。

「実は、私には、知的障害のある娘がいて、障害のある人に役にたつ仕事をしたいと願っていたのですが、通産省なので機会がありませんでした。1992年に工業技術院の総務課長になったので、チャンス到来と思いました。面倒をみるのに疲れて、家内が病に倒れ、悔しかったこともエネルギーになったかもしれません」

「役人生活 25 年で身につけた手練手管を総動員して強引に成案をまとめることができました。」

根掘り葉掘り尋ねたその手練手管とは――

- ★工業技術院長の私的研究会をつくって、同郷の大物を引き込み、思いを代弁してもらいました。この方は、ダウン症の子をもつ父だったのです。
- ★厚生省が乗り気になってくれないので、労働省にも研究会に参加してもらい、当時、仲が悪いと評判だった両省に競ってもらうように仕組みました。
- ★通産省では、最も力をもっていた局長を口説きました。息子さんに障害があると聞いていたので。
- ★公明党に関心のある議員がいると聞き、「グズグズしていると、議員立法になってしまう」と通産・厚生両省を脅しました。
- ★通産省で使われていた「福祉機器」ではなく、厚生省が提案した「福祉用具」を法律の名にとりいれて、厚生省のカオをたてました。

私は法律ができたことが嬉しくて、93年11月5日の社説で『人生の輝き支える福祉用具に』と書きました。読み返してみると、褒めてばかりはませんでした。

「いまの日本では、専門家でさえ途方にくれるほどややこしい手続きが必要だ。縦割りの法律によって日常生活用具、補装具、治療材料などと呼ばれ、「身体障害者手帳何級か?」「所得は?」など、制度を使わせないために思いついたとしか考えられないような基準も多い。大切なのは、必要な人すべてに、体に合った品を、タイミングよく届ける供給の仕組

みを作り上げることだ。日本以外の先進国では、手帳の有無や所得ではなく「必要かどうか」が判断の基準である。

6. 福祉用具国民会議とはじめ

2000年、介護保険法施行。補助器具は、福祉用具と名を変え、利用者1割負担で借りられることになりました。

介護保険の骨格をつくった“介護保険の鉄人”こと、いまは厚生労働省政策統括官の香取照幸さんが、埼玉県の老人福祉課長に出向していたときデンマークを訪ね、このシステムの威力を実感していたからでした。ところが、暗雲が立ち込めました。

元凶は、小泉内閣の骨太方針です。元厚生労働大臣の尾辻秀久さんは言いました「経済財政諮問会議は、経済と財政至上主義者でありますから、財政を立て直すためには、国民が泣こうと知ったことかという感覚の人達です。社会保障費を削れ、削れ、の一辺倒であります。2002年からの5年間で、1兆1000億削れ、その後の5年間も同じようにやれと言う」

介護保険は栄養失調に陥り、皺寄せは、福祉用具にも及びました。「福祉用具の貸し剥がし」です。

それに抗議して型破りな坐り込みが厚生労働省前で2週間にわたり繰り広げられました。

「改正介護保険に異議有り!」と描いた桜色のノボリが満開の桜をバックにひるがえりました。週休2日、午後5時には、店じまい。厚労省前の歩道は和気あいあい、さながら、“介護保険改正と福祉用具をめぐるシンポジウム会場”の様相を呈しました。



写真4

厚労省の人たちも次第に警戒を解き、「訴え」のチ

ラシを受け取るようになってゆきました。手弁当で
刷り増しする人も現れ、総計 1 万枚を超えました。

「改正介護保険法の問題点と異議」という和田勲さ
ん(写真 4 中央)「訴え」のサワリを抜粋してみます。

③福祉用具の利用でモチュベーションがアップさ
れている事をご存じないのでしょうか。出来ること
が膨らんだから、積極的に、前向きに活動し、それ
があってこそそのリハビリ効果ではないでしょうか？

④福祉用具の活用により人的サービスが縮減され、
対費用効果が高いことすら、ご存じないのですか？

7. 再び、わが家のこと

母は、この訴えの、その生き証人です。

9 月なかばの今朝、バッチリお化粧して、寝間着
からお気に入りのドレスに着替えた母が、朝食のケ
アのために母の家を訪ねた私を迎えて驚かせました。
3 クールめの化学療法中だなんて、とても見えませ
ん。

母を輝かせた最大の味方は、福祉用具でした。

【ご参考までに】

HP : <http://www.yuki-enishi.com/>

福祉と医療・現場と政策をつなぐえにしの

HP 『福祉用具の部屋』

- 1) 大熊由紀子：『寝たきり老人のいる国いない国』（ぶど
う社），1990
- 2) 大熊由紀子：『福祉が変わる医療が変わる～日本を変え
ようとした 70 の社説+α』（ぶどう社），1996
- 3) 大熊由紀子：『物語・介護保険～いのちの尊厳のための
70 のドラマ』（岩波書店），2010
- 4) 大熊由紀子：『ケア従事者のための死生学』Ⅲ章 5 『誇
り・ぬくもり・輝き—それを支える想像力と度強を』（ヌ
ーベルヒロカワ），2010